ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND2

彩昂祭の昼と夜

－第三章－

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND2

彩昂祭の昼と夜

―第三章―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

第三章　彩昂祭の昼と夜　— Day And Night —

1

彩昂祭、一日目——

華やかに飾りつけられた彩海学園の校内は、島内外から訪れた関係者や、他校の生徒たちでごった返していた。チョコレートにまつわる開幕直後のちょっとしたトラブルも、結果的には、お祭りムードを盛り上げるのに貢献したと言えなくもない。

来場者を奪い合う各クラスの客引き合戦が、次第に激しさを増している。そんな中、高等部一年B組の出し物は、順番待ちの行列が出来る程度の大健闘を見せていた。

「高等部一B——お化け屋敷やってまーす！　世界初、幻術サーバーを使った仮想現実大規模多人数お化け屋敷！　仮想現実大規模多人数お化け屋敷が楽しめるのは彩昂祭だけ！　よろしくお願いしまーす！」

昇降口前でチラシを配っているのは、ゴシックホラー風のドレスを着た棚原夕歩だ。快活で表情豊かな彼女だが、不吉な亡霊をイメージしたメイクが意外に似合う。背後の壁に張ったスプラッタ映画風ポスターと併せて、なかなかの宣伝効果だった。

「盛況ね、棚原。やっぱり世界初って謳い文句が効いたかな」

補充のチラシを運んできた築島倫が、夕歩を労うように声をかけてくる。ちなみに倫が身につけているのは、血まみれの破れかけたナース服。ゾンビ系の特殊メイクを施した彼女に気づいて、通りすがりの生徒たちがギョッとしたように振り返っていた。

「まあね。このポスターも好評みたいだし。学校中に張りまくった甲斐があったってものよね」

満足そうにうなずきながら、夕歩が背後のポスターを指さした。

ポスターに大きく印刷されているのは、古風なセーラー服を着て、恐怖に顔を歪めた藍羽浅葱のどアップだ。モデルの素材がいいからか、学生の手作りとは思えないほどのクオリティで、行き交う人々の注目を集めている。

もちろん浅葱は「なんであたしが!?」とモデルになるのを嫌がったのだが、彩昂祭実行委員だからという理由で無理やり承諾させた。大人しい恰好をしていれば、彼女は高等部でも指折りの美形なのだ。それを宣伝に利用しない手はないだろう。

「ところで藍羽の調子はどう？　あいつ、ずいぶん疲れてなかった？」

夕歩が心配そうな口調で倫に訊く。倫は他人事のように肩をすくめて、

「そうね。昨日もほとんど寝てないはずだし、午前中はあちこ

ち走り回ってたみたいだしね」
「……大丈夫なの？　例の幻術サーバーってやつ、操作できるのは藍羽だけなんでしょ？」
「まあ、なんとかなるでしょ。暁くんを一緒に教室に置いといたから。少しはやる気を出してくれるんじゃないかな」
「なんか、余計に不安になるんだけど――」
夕歩が溜息交じりにそう呟いた。
そんな彼女の表情が、次の瞬間、恐怖に引き攣る。巨大な金属の塊が、人波をかきわけるようにして、夕歩たちのほうへと近づいてきたからだ。
それは市街戦向けに開発された、超小型有脚戦車だった。対魔族用の試作兵器である。そんなものが学園内を動き回っていても騒ぎにならないのは、彩昂祭のせいだろう。どこかのクラスの出し物だと思われているのだ。
しかし超小型とはいえ、戦車は戦車だ。間近で対峙したときの威圧感は凄まじいものがある。恐怖で硬直する夕歩の前に、有脚戦車は装甲を軋ませながら停止する。
『――やあ、失敬。そのチラシ、拙者にも一枚いただけぬか？』
有脚戦車の外部スピーカーから聞こえてきたのは、暑苦しい時代劇風の日本語だった。ぎゅうん、とモーター音を響かせながら、無骨な作業用マニピュレーターが伸びてくる。
「ど、どうぞ」
夕歩はわけがわからないまま、怖ず怖ずとチラシを差し出した。戦車のマニピュレーターが、そのチラシを器用に回収する。そして有脚戦車の操縦士は、照準用のカメラでチラシをじっくりと確認すると、
「うむ、かたじけない――」
一方的にそう言い残し、その場でくるりと車体を旋回させた。
そして夕歩たちが呆然と見送る中、有脚戦車はそのまま人混みの中へと戻っていく。
「な、なに……今の？」
極度の緊張から解放された夕歩が、脱力して後ろ向きに倒れそうになる。
それを危ういところで抱き支えたのは、たまたま居合わせた一般客だった。
「おっと、大丈夫？」
耳元で聞こえてきた爽やかな声に、夕歩はハッと我に返る。彼女が慌てて姿勢を正すと、支えてくれた相手と目が合った。黒いジャケットにルーズなネクタイ姿の、ボーイッシュな雰囲気の女子だった。息を呑むほど端整な顔立ちの男装少女だ。
「す、すみません。ありがとうございます！」
動揺で声を上擦らせながら、夕歩が頭を下げる。男装の少女は人懐こく微笑んで、
「ううん。ボクのほうこそ余計なお節介をしてごめん。怪我はない？」
「は、はい」

「そう。よかった」
男装の少女は涼しげに目を細め、夕歩が落としたチラシの束を拾い上げた。
「へえ、お化け屋敷か。その服装はお化けの仮装？　可愛いね」
「え？　そ、そう……ですか？」
少女のストレートな賛辞を聞いて、夕歩が頬を赤らめる。男子が口にしたら嫌味に思えるようなセリフでも、目の前の綺麗な少女に耳元で囁かれると、胸の高鳴りを抑えきれない。
「用事が終わったらボクも遊びに行くよ。じゃあね」
チラシの束を夕歩に手渡して、少女は微笑みながら去って行く。そんな彼女の後ろ姿を、夕歩は興奮した様子で見送り、
「み、見た、築島？　今の人？」
「うん。すごく恰好よかったね」
「だよね、だよね。びっくりした！」
倫のクールな感想に、夕歩は勢いよく何度もうなずいた。
そんな夕歩を見返しながら、倫は頬に手を当てて考えこむ。
「でも、なんだろ……さっきの彼女、前にどこかで見かけたような気が……誰だっけ……？」

2

暁古城は、見知らぬ洋館の一室に立っていた。
薄暗い廃墟のような建物だ。頼りなく揺れるロウソクの炎が、荒れ果てた室内を仄かに照らしていた。豪華な家具のほとんどは何者かに叩き壊されて、床や壁には、重い刃物で斬りつけたような無数の傷跡が残されている。
酷い嵐の夜だった。容赦なく吹きつけてくる雨風が、ひび割れた窓を揺らしている。雷光が夜空を白く染め、そのたびに大気が地鳴りのように震える。その絶え間ない雷鳴にまぎれて、かすかに聞こえた誰かの悲鳴に、古城は顔をしかめて振り返った。
「誰だ!?　誰かいるのか……!?」
闇の中に古城の声が何度も反響する。しかし返事は聞こえてこなかった。漠然とした不安に襲われながら、古城は部屋の外に出る。
「どこだ、ここは……」
古城の表情に、焦りが浮かんだ。迷路のように曲がりくねった廊下は、暗く長いトンネルのように、どこまでも果てしなく続いているように感じられた。悲鳴は今も続いていたが、嵐の音に邪魔されて、どこから聞こえてくるのかわからない。
それでも古城は、かすかな残響を頼りに階段を下りて、館の広間へと向った。
窓の外で閃いた稲妻が、闇に沈む広間を、一瞬だけ真昼のように照らし出す。
「浅葱……か？」
閃光に浮かび上がったのは、折り重なって倒れた制服姿の学

生たちだった。その中に見知った少女の顔を認めて、古城は慌てて走り寄る。

両目を大きく見開いたまま、浅葱が仰向けに倒れていた。彼女が着ている古風なセーラー服の胸元には、鮮血がべったりとこびりついている。

「浅葱！　しっかりしろよ、おい！　浅葱！」

浅葱を抱き起こした古城は、その身体の冷たさにゾッとする。彼女の肌はロウのように白く、弛緩した肉体に生気は感じられなかった。

「死んでる……ウソ、だろ……」

恐怖に引き攣ったままの浅葱の死に顔を見下ろして、古城は呆然と呟いた。

白く濁った浅葱の瞳が、ギョロッと古城を睨んだのは、その直後だ。死んだはずの浅葱が獣じみた唸り声を上げて牙を剥き、硬直した古城を目がけて襲いかかってくる。

「う、うわあああああっ！」

凄まじい怪力で浅葱に押し倒されて、古城は為すすべもなく悲鳴を上げた。

そして床へと倒れこむ直前、誰かが古城の身体を優しく抱き留める。

「――ちょっと、古城、大丈夫？」

浅葱の声とともに古城の視界が揺れた。古城がかけていた3Dメガネ風のスマートグラスが、乱暴な手つきでむしり取られる。

ぼやけた視界の中で古城が見たのは、不安そうな顔でのぞきこんでくる制服姿の浅葱だった。

「あ、浅葱？」

悪夢から目覚めた直後のような気分で、古城は彼女をまじまじと見上げる。

浅葱は血まみれではなかったし、死体のような顔色でもなかった。いつもどおりの華やかな顔立ちの女子高生だ。

「い、生きてるのか……？」

「当然でしょ。たかが学園祭のお化け屋敷になにを期待してるのよ？」

「お化け屋敷……？」

呆れ顔の浅葱の言葉を聞いて、古城は周囲を見回した。

そこは廃墟の洋館などではなかった。暗幕で仕切られたただの教室だ。窓の外は、彩昂祭の真っ最中である。あのリアルな恐怖の館の風景は、スマートグラスをかけた人間の脳内にだけ投影される幻影だったのだ。

「もしかして、これが仮想現実お化け屋敷ってやつか？」

「そ。幻術サーバーが脳に直接投影してる疑似感覚ね。リアルだったでしょ？」

浅葱がそう言って得意げに胸を張る。幻術投影サーバー自体は、絃神市内の企業の製品だが、実際のプログラミングを担当したのは彼女だった。つまりあの洋館や死体のデータを作

成したのも、浅葱の仕業ということになる。
「まあな……ていうか、おまえ、趣味悪すぎだろ」
「はいはい、あたしは大丈夫だからさ。ほら、よしよし、泣かないの」
冗談めかした口調で言いながら、浅葱が古城の頭を撫でる。古城はそんな彼女の手を鬱陶しげに払いのけ、
「泣いてねーよ。ちょっと吐きそうになっただけで」
「なんで吐くのよ!?　ていうか泣け！」
古城の頬をつねり上げながら、浅葱が身勝手な台詞を吐く。
「まあいいわ。お腹空いたから、なにか食べに行くわよ。古城もつき合いなさいよね」
「俺はいいけど、幻術サーバーってヤツの調整は大丈夫なのか？」
薄暗い教室内を見回しながら、古城は不安そうに訊き返した。
地道な宣伝活動の成果が出たのか、古城たちのクラスのお化け屋敷には、けっこうな数の一般客が訪れている。半分寝ぼけて、なにも知らずに仮想現実を体験した古城とは違って、彼らはむしろ積極的にリアルな恐怖の館を楽しんでいるようだ。
サーバー管理者である浅葱が持ち場を離れたら、お化け屋敷の運営に支障をきたすのではないかと古城は心配したのだが、
「一回起動させちゃえばね。モグワイに監視させてるから、しばらくはほっといて大丈夫よ」
浅葱は澄まし顔でそう答えて歩き出す。そんな浅葱に無理やり手を引かれて、古城は薄暗い教室を抜け出した。

3

古城たちが最初に向かったのは校庭だった。校舎正面のグラウンドには運動部主催の模擬店が、ずらりと軒を並べている。彩昂祭名物の屋台街だ。
「おお、彼氏殿！　彼氏殿ではござらぬか！」
浅葱と手分けして屋台の行列に並んでいた古城を、やたら暑苦しい口調で誰かが呼び止める。振り返った古城の視界に映ったのは、赤い装甲に覆われた超小型有脚戦車だった。
戦車上部のハッチが開いて、中から推定年齢十二歳前後の外国人の少女が顔を出す。身体にぴったりとフィットした彼女のパイロットスーツには、ひらがなで『でぃでぃえ』と書かれたゼッケンが縫いつけられていた。
「おまえ……たしか、浅葱の知り合いの……」
「いかにも。拙者、リディアーヌ・ディディエでござる。再びお目にかかれて光栄でござる」
「あ、ああ……それよりもおまえ、それに乗って正門から入って来たのか？」

異様に悪目立ちするリディアーヌの戦車を眺めて、古城は軽く頭を抱えた。

しかしリディアーヌは悪びれもせず堂々とうなずいて、

「然り。いちおう軍事機密の機体とはいえ、貴校には、拙者より派手な出で立ちの者も大勢闊歩しておるゆえ、特に大過ありますまい」

「……まあいいか。校内で問題は起こしてくれるなよ」

古城は投げやりな気分でそう言った。たしかにリディアーヌの言うとおり、彼女の戦車は、ゆるキャラの一種だと必死に言い張ればそう見えないこともない。

「心得て候。ときに彼氏殿、ひとつお尋ねしたいのだが、こちらの教室は何処にござろうか？」

戦車の作業用マニピュレーターには、古城たちのクラスのお化け屋敷のチラシが挟まれていた。それを指さしてリディアーヌが訊いてくる。

「ウチのクラスなら、あっちの校舎の階段を上ったところだけど……」

その戦車はそもそも校舎に入れるのだろうか、と素朴な疑問を抱く古城に、リディアーヌは無邪気な笑顔を見せた。

「承知つかまつった。感謝でござる」

再び戦車に潜りこんだリディアーヌは、古城が止める間もなく、校舎の方向へと急発進する。土埃とともに去って行く有脚戦車を、古城はしばらく呆然と眺めていた。

「……なんで〝戦車乗り〟が彩昂祭に来てるのよ」

買い出しを終えて戻って来た浅葱が、硬い表情でそう呟いた。リディアーヌに見つかるのを警戒しているのか、屋台の陰に半分身を潜めたままである。

「おまえに会いに来たんじゃねーのか。お化け屋敷に行くって言ってたぞ」

「どうせ幻術サーバーが目当てでしょ。抜け出しておいて正解だったわ」

浅葱がホッとしたように息を吐く。やたらと浅葱に好意的なリディアーヌだが、浅葱のほうは、あの押しの強い少女のことを若干苦手にしているのだ。

「あんなに懐かれてるんだから、相手してやってもよかったんじゃねーか？」

「あんたね、あたしにあのデカブツを引き連れて歩けっての？」

「まあ、それもそうか……おまえの知り合いって意外に変なのが多いよな」

「古城にだけは言われたくないわね……」

無責任な態度の古城を睨んで、浅葱が頬を膨らます。と、

「先輩！　暁先輩！」

近くに立っていた模擬店の売り子が、そんな古城たちに気づいて声をかけてきた。ショートカットの快活そうな中等部女子だ。暁凪沙のクラスメイトの少女である。

「ああ、おまえ、女バスの……」

「はい、進藤です。お久しぶりです。暁先輩は藍羽先輩とデート中ですか？」
「違ェよ。浅葱の買い出しにつき合ってるだけだ」
「ふふーん、大丈夫ですよ。雪菜には内緒にしときますから」
速攻で否定する古城を見上げて、進藤美波はニヤニヤと笑う。彼女は雪菜の友人でもあるのだ。
「というわけで、先輩。こちら口止め料込みで一本三百円です」
「おまえな……」
「特別に二本で五百円でいいですよ」
目の前に差し出された焼きトウモロコシを眺めて、古城は気怠く苦笑した。美波には色々と誤解されているような気がするが、いちいち言い訳するのも面倒だ。
「毎度ありー」
古城の五百円硬貨を素早く受け取って、美波が愛想よく商品を手渡してくる。両手に焼きトウモロコシを持って戻って来た古城を、浅葱は心なしか冷ややかな表情で見つめて、
「ホント、古城は年下に甘いのよね。押しに弱いっていうか、ええ恰好しいっていうか」
「なんでトウモロコシ買っただけでそこまで言われなきゃなんねーんだよ。喰わないのか？」
「食べないなんて言ってないでしょ」
不満そうに口を歪める古城から、浅葱が焼きトウモロコシを奪い取る。二人はそのまま校庭の隅へと移動して、花壇の縁に並んで腰掛けた。
「うん、やっぱり焼きたてを外で味わえるのはいいわよねー……って、古城、食べないの？」
「あー……あんな映像見せられたあとじゃ、ちょっと食欲がな」
「情けないわねー。あの程度で」
自分のぶんの焼きトウモロコシをぺろりと平らげた浅葱が、物欲しそうな表情で古城を見る。古城は溜息交じりに笑って、
「喰うか？」
「くれるの!?　ありがと！」
古城が差し出した焼きトウモロコシに、浅葱は躊躇なくかじりつく。ほっそりとした外見に似合わず、彼女は大食いキャラなのだった。
そして仲睦まじげにトウモロコシを分け合う古城たちに目を留めて、見知らぬ女子生徒が突然話しかけてくる。
「あの、ごめんね。彩昂祭ＢＣＣ推進委員のものなんだけど」
「……え？」
「よかったら、これ、出場しない？　お二人で」
「ＢＣＣ……ベストカップルコンテスト……？」
強引に押しつけられたチラシを眺めて、古城と浅葱が眉をひそめた。
彩海学園でもっともお似合いのカップルを決めるという趣旨の、一般参加型ステージイベントの案内だ。上級生とおぼしき

女子生徒は、古城たちにすがるように胸の前で手を合わせて、
「出場者が足りなくて困ってるの。今日の十五時からなんだけど」
「いや、あの、俺らはべつにカップルってわけじゃ……」
「――出ます！」
当然断ろうとした古城の言葉を遮って、浅葱が勢いよく言った。思いがけない彼女の宣言に、古城はぽかんと間の抜けた表情を浮かべて、
「あ、浅葱？　おまっ……なにを勝手に……！」
「いいから！　これ、見なさいよ！」
浅葱はそう言ってチラシの隅を指さした。優勝賞品が書かれた欄である。
「優勝賞金は、学食の食券三万円分……！　並ばずに注文できるファストパスと優先ボックスシート付き……!?」
予想を遥かに上回る賞品の豪華さに、マジか、と古城の目つきも変わる。たしかにカップルコンテストなどという恥ずかしい企画に参加者を集めるためには、それなりの見返りが必要なのかもしれないが――
「大丈夫よ。カップルコンテストって言っても、そんな真剣な感じでもなくて、仮装ＯＫ、性別不問のゆるい企画だから」
「せ、性別不問？」
上級生の女子生徒がにこやかに説明し、古城と浅葱が不安そうに顔を見合わせる。そして、
「じゃあ、お二人は参加ということで」
「あ、はあ……」
そういうことになった。

4

同時刻――
体育館のステージ上では、雪菜が武器を構えていた。
「待ちや、妖怪！　逃がさんぜよっ！」
裂帛の気合いとともに雪菜はモップの柄を振り下ろし、その先端を突きつけられた男子生徒が逃げ惑う。中等部三年Ｃ組による演劇〝西遊記〟は、間もなく中盤のクライマックスを迎えるところだった。雪菜は主役の孫悟空役。体育館の観客席は、詰めかけた観客たちでほぼ満席状態だ。
「げ、げえっ！　貴様ッ、斉天大聖ッ！」
猪八戒役である男子サッカー部員の高清水が、竹製の熊手を構えて叫ぶ。こちらもなかなかの熱演だ。
ちなみに雪菜が着ているのは、ミニスカートのチャイナドレス。頭につけた金の輪っかと、腰の尻尾だけが、かろうじて孫悟空らしさをアピールしている。当初はサルの着ぐるみを着る予定だったのだが、それでは客寄せにならないということで急遽変更になったのだ。どちらにしても恥ずかしいことに変わりはないので、雪菜もあえて文句は言わなかった。

なぜ土佐弁、と観客たちが疑問に思う中、その雪菜がたどたどしく台詞を読み上げる。

「おんしゃぁ何もんなが？　なしてわしの名前を知っちゅうがか？」

「ちっ、訊かれたからには答えてやろう。我が名は猪剛驫、かつて天界にあっては天蓬元帥と呼ばれた者よ！　弼馬温ごとき、我が馬鍬の錆にしてくれるわ！」

「ほたえなや、ブタ公。返り討ちにしちゃるき！」

「ぶひーっ！」

雪菜のモップと打ち合って、高清水がよろよろと後退した。追い打ちをかけるべくモップを頭上に振り上げて、雪菜はそこで動きを止める。

よろめく高清水の周囲に突然、奇妙な影が出現したからだ。書き割りの背景を蹴散らしてステージ上に乱入してきたのは、ボロボロの布きれをまとった白骨死体だった。劇の出演者や小道具ではない。魔術によって仮初めの生命を与えられた怪物だ。死体から漂う強い魔力に、雪菜の表情が硬く強張る。

「骸骨兵士!?　いったい、誰が、こんな……!?」

襲いかかってくる怪物の腕を、雪菜はモップの柄で受け止めた。骸骨兵士は、死体を媒体にした式神の一種だ。剣巫である雪菜が脅威に感じるほどではないが、問題は、誰がなんの目的で、そんなものを送りこんできたのかということだ。

「ゆ、雪菜ちゃん……じゃなくて、悟空！　なにこれ!?　こんなの聞いてないよ！」

ステージに現れた骸骨兵士は全部で五体だった。そのうちの一体に襲われて、三蔵法師役の暁凪沙が悲鳴を上げている。

「くっ……鳴雷ッ――！」

呪力をまとった雪菜の蹴りが、骸骨兵士の頭部を粉砕した。チャイナドレスの裾が大きく翻り、ステージを凝視していた観客たちがどよめく。彼らはまだこの骸骨兵士たちが、劇の演出だと思っているのだろう。しかしその勘違いを訂正している余裕はない。

「きゃあああああ――っ！」

雪菜の背後で新たな悲鳴が上がった。三蔵法師役の袈裟を着た凪沙が、新たな怪物に襲われている。それは全長四、五メートルにも達する、金属製の彫像だった。

骸骨兵士と同様に、魔術によって生命を吹きこまれた悪魔像だ。

「ガーゴイル!?　そんな……!?」

雪菜の唇から血の気が引いた。素手での近接格闘を得意とする雪菜にとって、金属製の悪魔像は相性が悪い。骸骨兵士たちに邪魔されて、悪魔像を無力化できるほどの強力な呪術を使う余裕もない。

観劇中の客たちも、さすがに異変に気づいたらしい。増え続ける骸骨兵士の襲撃を受けて、あちこちで悲鳴が上がっている。

「危ない、暁！」
悪魔像に潰されそうになった凪沙を、高清水が危ういところで突き飛ばした。しかしバランスを崩した彼らは、そのままステージの上に倒れこむ。
「凪沙ちゃん、逃げて！」
倒れた二人を、悪魔像が無造作に踏みにじろうとする。それを止めようとした雪菜だが、彼女の素手の攻撃では、悪魔像の巨体は微動だにしなかった。悪魔像がゆっくりと足を踏み下ろし、雪菜の表情が絶望に歪む。
ステージ上に涼やかな少女の声が響いたのは、その直後のことだった。
「――〝蒼〟」
悪魔像の眼前に、青い甲冑をまとった騎士の幻影が出現する。無貌の騎士。古びた空っぽの鎧の中に、地獄の業火を封じ込めた悪魔の眷属だ。
青騎士が抜き放った大剣の一撃が、悪魔像を薙ぎ倒す。いかな悪魔像といえども、しょせんは魔術で操られている傀儡に過ぎない。本物の悪魔の眷属の敵ではなかった。
「魔女の〝守護者〟!? あなたは――！」
青騎士を従えている少女に気づいて、雪菜が驚愕の声を洩らす。微笑みながら振り返ったのは、男物のジャケットを着た美しい少女だった。
「やあ、姫柊さん、久しぶりだね。どうにか間に合ってよかったよ」
「優麻さん……どうしてここに!?」
「その話はまたあとで。とりあえずこいつらをどうにかしよう」
気絶した凪沙を抱き起こしながら、仙都木優麻がステージの上を見回した。
まだ動いている骸骨兵士の数は七体。そして悪魔像も健在だ。青騎士の攻撃で傷ついたとはいえ、金属製の肉体が苦痛を感じている様子はない。
「やはり今のボクの力じゃ倒しきれないか。〝蒼〟は、もともと戦闘向きの〝守護者〟ではないしね」
優麻が残念そうに肩をすくめた。しかし彼女は、すぐに悪戯っぽく唇の端を吊り上げて、
「だけど空間制御の精密さには自信があってね。たとえばこんな芸当も出来る――」
呟く優麻の腕の中で、空間が波紋のように大きく揺らいだ。なにもない虚空から彼女が取り出したのは、黒いベースギター用のギグケースだった。高難度魔術であるはずの空間制御を、魔女である優麻は、自在に操ることができる。雪菜が教室に置いてきたはずのケースを、その力で取り寄せてみせたのだ。
「〝雪霞狼〟……！」
優麻から渡されたケースの中から、雪菜は槍を引き抜いた。全金属製の銀色の槍だ。獅子王機関の秘奥兵器〝七式突撃降魔機槍〟――魔力を無効化し、ありとあらゆる

結界を斬り裂く破魔の槍である。
「あとは頼むよ、姫柊さん」
優麻が人懐こい笑顔で言う。魔力を無効化する〝七式突撃降魔機槍（シュネーヴァルツァー）〟は、骸骨兵士（スケルトン）や悪魔像（ガーゴイル）のような、魔術によって駆動する疑似生物の天敵だ。かつて雪菜と戦った優麻は、そのことをよく知っている。
「はい！」
流れるような動きで槍を構えながら、雪菜は力強くうなずいた。
銀色の槍が放つ閃光が、凄まじい速度で悪魔像（ガーゴイル）を刺し貫く。ステージ上の怪物たちがすべて動きを止めるまで、それから数秒とかからなかった。

5

腹ごしらえを終えた古城たちは、天文部の部室を訪れていた。たまたま廊下を歩いていたら、顔見知りの後輩に声をかけられて連れてこられたのだ。
天文部の出し物は〝占いの館〟だった。占星術は天文学との関わりが深いので、まったくのこじつけというわけでもない。〝魔族特区〟の研究データを反映したという独自の占いは、よく当たるとなかなか好評らしく、部室の前には長い行列が出来ていた。
「ふーん、けっこう本格的ね」
黒い天幕で覆（おお）われた天文部の部室を見回して、浅葱が感心したような声を出す。
「だけど本当によかったのか。外の列に並ばなくて」
背後の行列を横目で振り返りながら、古城は占い師役の後輩に質問した。
魔術師風の黒いローブを羽織っているのは、中等部三年生の甲島桜（こうしまさくら）。凪沙や雪菜のクラスの学級委員長で、クールな雰囲気の眼鏡少女である。古城たちは彼女の案内で、裏口からこっそり入れてもらったのだ。
「妹さんには、いつもお世話になってますから」
占い用のカードをシャッフルしながら、大人びた口調で桜が言う。
「それで、なにを占いましょうか。運勢、前世、お仕事、金運、恋愛、結婚、出産、不倫、あとはお二人の相性や死亡予定時刻まで占えますが」
「そんなにあるのか!?　有能すぎだろ、甲島さん……！」
「ていうか、さすがに出産や不倫の需要はないと思うんだけど……あったらヤバいでしょ」
古城と浅葱が、半（なか）ば呆れながら呟いた。ただの占いとはいえ、そこまで多くの選択肢を与えられると、どれを選べばいいか迷ってしまう。
「まあ、とりあえず金運でも占ってもら――」

「相性！　あたしとこの男の相性で！」
　無難なテーマを選ぼうとした古城の押しのけて、浅葱が身を乗り出した。
「お、おい、浅葱……」
「馬鹿ね。相性占いなら、一度にあたしたち二人まとめて占ってもらえるでしょ。順番待ちの生徒があんなにいるんだから、少しは気を遣いなさいよ」
「な、なるほど……そうか……」
　もっともらしい浅葱の説明に、古城は素直に納得した。
　そんな二人のやりとりを聞いて、クス、と桜が小さく笑う。
「お似合いですね。お二人は」
「……え？　なにそれ。占い？」
「いえ、お世辞です」
　訝しげに目を細めた浅葱に、桜は澄まし顔で返事をする。
「それでは、お二人の名前と生年月日をこちらに」
「あ、ああ」
　桜が差し出してきたメモ用紙に、古城と浅葱がそれぞれ署名する。その紙を軽く一瞥すると、桜は机の上にカードを広げた。慣れた手つきで、その順番を並べ替えていく。
　彼女が放つ独特のオーラに、古城はゴクリと唾を呑み、
「ふ、雰囲気あるな……」
「しっ！　黙って！」
　浅葱もいつになく真剣な表情で、桜の手元を注視していた。
　カードの配置を終えた桜が、順番にそれらをめくっていく。そして最後のカードをめくり終えた瞬間、彼女の表情にかすかな驚きが浮いた。
「これは……」
「ど、どう？」
　浅葱が緊張の面持ちで桜の言葉を待つ。桜の手の中に握られていたのは、物騒な槍を持った女神のカードである。伝統的なタロットに〝槍〟などというアルカナはなかったはずだから、オリジナルのカードなのかもしれない。
「槍……」
「は？」
　桜がぼそりと洩らした呟きに、浅葱が不安げな表情を浮かべた。それを見た桜は、すぐに微笑んで首を振り、
「あ、いえ。お二人の相性は抜群です。ただ、不安材料として、暁先輩に誘惑、浮気、鈍感、不運、不可抗力、あとは状況に流されやすいという暗示が」
「ああ……」
　なぜか物凄く納得したように浅葱がうなずく。
　桜はカードを机の上に伏せながら、少し心配そうに古城を見上げて、
「それから槍に気をつけてください。ほかの女性を怒らせたりしないように。私にアドバイスできるのはそれだけです」
「そ、そうか……ありがとう。参考になった……」

古城はなぜか青ざめた顔で、ダラダラと脂汗を流していた。予想外の動揺を見せる古城を、浅葱は少し不思議そうに眺めて、

「大丈夫なの、古城？　今にも死にそうな顔色してるわよ？」

「き、気のせいだろ……ははっ……」

そう言って古城は弱々しく壁にもたれかかる。

浅葱はやれやれと溜息をついて、

「ところでさっきから気になってたんだけど、隣のブースはなにをやってるの？」

「懺悔室です」

桜が淡々と説明した。天文部の〝占いの館〟の隣では、ボランティア部主催の謎イベントが行われている。具体的な出し物の内容は謎だが、そちらもかなりの行列が出来ていた。

「……懺悔室？」

浅葱が、なにそれ、と眉を寄せる。

「A組の叶瀬さんが、生徒の罪の告白を聞くという出し物だそうです」

「中等部の聖女ちゃんの悩み相談室ってこと？」

「よくわからんが、すごい人気だな」

古城は廊下側の窓から顔を出し、懺悔室の順番待ちの列を眺めた。教室のドアの隙間から、叶瀬夏音のおっとりした声が、途切れ途切れに聞こえてくる。

「……それでは病気の妹さんはいらっしゃらなかったんですね……よかった」

「え……は、はい……」

心から安堵したような夏音の言葉に、懺悔中の相談者が低いうめき声を洩らした。良心の呵責に苦しんでいるような声だ。

「いえ、あの……す、すみません！　俺……ここに来れば、叶瀬さんと話が出来ると思って……そんな邪な考えで作り話を……お、俺は……俺はなんて薄汚い人間なんだァァァ――ッ！」

「え!?　あ、あの……！」

悔恨の涙を流しながら、男子生徒が懺悔室を飛び出してくる。夏音は慌てて彼を呼び止めようとしたが、男子生徒はすでに走り去ったあとだった。

「次の方、どうぞ」

会場整理をしていた夏音のクラスメイトが、事務的な口調で新たな相談者を案内する。戸惑いの表情を浮かべたまま、懺悔室の中に戻っていく夏音。

「懺悔って、ああいうイベントなんだっけ？」

浅葱が無表情に訊いてくる。古城は無言で首を振り、夏音に同情するように短く嘆息した。

「さあな……」

6

「――〝雪霞狼〟！」

銀色の槍の一閃が、霧状の魔物を斬り払う。
しかし最後の亡霊の消滅を確認しても、雪菜の表情は険しいままだった。
骸骨兵士、悪魔像、そして亡霊――次から次へと絶え間なく出現する怪物たちによって、校内は大混乱に陥っている。もちろん演劇の続行も不可能だ。そもそも体育館にいた観客たちのほとんどが、いつの間にか忽然と姿を消していた。
館内に残っていたのは、彩海学園の生徒だけ。しかし彼らの大半は、怪物たちに追われて散り散りに逃げ惑っている。凪沙や高清水のように、恐怖で気絶している者も多い。
「ここはもう大丈夫だ。跳ぶよ、姫柊さん！」
倒れた凪沙たちの周囲に、防護結界を張り終えた優麻が、壁に空間転移用の〝門〟を開いた。行き先は彩海学園の本校舎だ。
彩海学園の敷地内に、怪物が出現した理由はわからない。しかし体育館だけでなく、ほかの校舎が襲われている可能性は高かった。それを放置しておくわけにはいかないと、雪菜は優麻に連れられて〝門〟をくぐる。しかし空間転移で移動した雪菜たちが目にしたのは、それ以上に驚くべき光景だった。
「これは……いったい……!?」
雪菜が驚きに声を詰まらせる。
そこは雪菜たちが知っている彩海学園の校舎ではなかった。恐ろしく古びた廃校舎だ。床の上には分厚く埃が積もり、教室のドアは鎖で固く閉ざされている。
そして窓の外は夜だった。激しい雨風が吹き荒れる嵐の夜だ。
「まるで廃墟だね。しかも閉鎖されてから、かなりの時間が経ってるみたいだ」
校舎の壁に手を触れながら、優麻が言った。再び開かれた〝門〟を通って、彼女と雪菜は隣の校舎へと移動する。しかしそこも同じだった。暴風雨に襲われた夜の廃校舎だ。
「そんな……そんなはずは……ついさっきまで学園祭が行われていたはずなのに……」
「そうだね。さすがにこれは予想外だったな」
優麻が冷静な口調で呟く。彼女の言葉に、雪菜はかすかな違和感を覚えた。彩海学園でなんらかの異変が起きることを、最初から知っていたような口振りだったからだ。
「優麻さんは、どうして彩昂祭に？　わたしたちを助けてくれたのは偶然ですか？」
雪菜の疑問に、残念ながら、と優麻は首を振る。
「〝図書館〟残党の捜索を人工島管理公社に依頼されたんだ。それがボクの罪を不問にする代償ってわけ。曲がりなりにも元〝総記〟の娘として、それなりに組織の内情にも明るいしね」
「〝図書館〟の捜索、ですか……？」
「そう。そんなわけで今回は、メイヤー姉妹の脱獄を調査するために来たんだよ。彼女たちの脱獄を手引きした協力者の正体が、まだつかめてなかったからさ」

そう言って優麻は小さく溜息をついた。特区警備隊（アイランド・ガード）に身柄を拘束されていた二人組の魔女〝メイヤー姉妹〟が、脱走騒ぎを起こしたのは昨日のことだ。彼女たちはこの彩海学園で再び逮捕されたのだが、二人の脱走を手助けした人物の正体については、今も謎のままだった。

「メイヤー姉妹の協力者が、彩海学園にいるかもしれないということですか……？」

「それを確かめるつもりだったんだ。このほうが目立たないかと思って、いちおう男装もしておいたんだけど」

「はあ……なるほど……」

それは逆効果ではないか、と思って雪菜は言葉を濁（にご）す。美人すぎる優麻の男装は、おそらく老若男女お構いなしに人々の注目を集めていたはずだ。

「じゃあ、もしかして、この異変の原因は、〝図書館（LCO）〟の魔導書ですか？」

「それはまだわからない。でも、似てると思わないか、姫柊さん。この状況、あの波朧院（はろういん）フェスタの夜に」

優麻が真面目な表情で訊いてくる。雪菜はハッと息を呑んだ。

「まさか、闇誓書（やみせいしょ）……!?」

「うん。ボクの母親――仙都木阿夜（とこよぎあや）は、この学校で闇誓書を使って、自分の望むままに世界を書き換えてみせた。十年前の光景を再現したり、あり得たかもしれない可能性の世界を実体化してみせたりね」

「……」

雪菜は無言でうなずいた。闇誓書は、現存する数多くの魔導書の中でも、破格の威力を秘めた危険な書物だ。実際に仙都木阿夜と戦った雪菜は、その力をよく知っている。

「ですが、闇誓書は、もう――」

「そうだね。かつて存在した闇誓書の原本は、那月（なつき）先生が十年前に焼き捨てた。彼女の記憶を奪って、ボクの母親が再現した複製（レプリカ）も、キミと古城が消滅させたはずだ」

「はい」

「だけど現実に世界は書き換えられている。厄介なことにね」

優麻が窓の外を眺めて唇を噛む。

たしかに闇誓書の力をもってすれば、真昼を夜に変えることも、校舎を廃墟に変えることも容易だろう。むしろそれ以外に、この異様な現象を実現する手段を雪菜は知らない。

だがしかし、闇誓書に記録されているのは、所有者の望みのままに世界を書き換える力だ。つまり誰かが、この世界の出現を望んだということになる。

「誰が……なんのためにこんな廃墟の世界を……？」

「さっぱり思いつかないね。だけど、その謎を解く鍵があるとすれば、古城かな」

「……暁先輩、ですか？」

「闇誓書の起動には、膨大な魔力が必要なんだ。ボクの母親は、

魔力源として星辰の力を利用したけれど、惑星の配置が整うまで十年も待たなきゃならなかった。この世界が闇誓書に生み出されたというのなら、星辰の力に匹敵する強力な魔力源が使われたことになる」

優麻が告げたひと言に、雪菜が驚いて目を瞬いた。

「ひょっとして第四真祖の魔力を……!?」

「ほかの可能性を思いつかなくてね」

優麻が困ったように苦笑した。雪菜も小さく息を吐く。強大過ぎる第四真祖の力は、否応なく面倒事を引き寄せる。知らぬ間に災厄に巻きこまれるのは、いかにも彼にありそうなことだった。

「問題は、誰がどうやって古城を利用してるのか……ってことだけど、心当たりが多すぎてさ。キミが古城と一緒にいてくれれば少しは安心できたんだけど」

「え……？　あ、そうですね。すみません……」

残念そうな視線を向けられて、雪菜は思わず謝ってしまう。

雪菜は、政府獅子王機関から派遣されてきた、第四真祖の監視役である。古城がなにかしら問題を起こしたとしたら、それは雪菜の監督不行届だ。

しかし優麻が言いたかったのは、そういうことではなかったらしい。

「駄目だよ、姫柊さん。あいつに誘ってもらえるなんて期待しちゃ。せっかくの学園祭なんだし、古城と一緒に回りたかったら、もっと自分から積極的に行動しないとさ」

「い、いえ、わたしはべつに期待していたわけでは」

「でも、どうせなら一緒に過ごしたいって思わなかった？」

「わ、わたしはただの監視役なので……」

「学園祭は明日まであるんだし、この異変を素早く解決すれば、古城と一緒に過ごすチャンスもあるかもだね。姫柊さんが興味がないって言うのなら、ボクが代わりに誘ってみるけど」

「い、いえ、まったく興味がないこともないというか……」

優麻の愉しげなアドバイスに、雪菜は視線を泳がせる。

そのとき薄暗い校舎の中に、甲高い悲鳴が響き渡った。弾かれたように振り返った雪菜たちが見たのは、怪物に襲われて逃げ惑う生徒たちの姿だった。

「ウィルオーウィスプ!?」

「まいったな。これじゃキリがない……！」

生徒たちを襲っているのは、宙を舞う無数の火球だった。精霊か鬼火の類だろう。強力な魔物ではないが、危険なことには変わりない。

怯える生徒たちを庇いながら、雪菜たちが火球を迎撃する。

しかし校舎内に避難していた生徒たちは、彼らだけではなかったらしい。校舎のあちこちで新たな魔物たちが出現し、そのたびに新たな悲鳴が上がる。優麻の言うとおり、彼女と雪菜の二人だけで生徒全員を護るのはほぼ不可能だ。

「優麻さん、彼らは……？」

「大丈夫。恐怖で気を失ってるだけだ」
廊下に倒れていた生徒たちの傍に屈みこみ、優麻は安堵の微笑を浮かべた。雪菜は怪訝そうに目を細め、
「生徒を傷つけるのが目的ではない、ということですか？」
「危害を加えずに恐がらせるだけ、か。まるで恐怖の館だね」
「恐怖の館……ですか？」
「うん。遊園地のアトラクションのね」
何気ない優麻の軽口に、雪菜は意表を衝かれて動きを止めた。
「そういえば暁先輩のクラスの出し物は、お化け屋敷だと聞きました。しかも〝魔族特区〟の幻術投影技術を使っていると……！」
「幻術？　そうか……ようやく絡繰りが見えてきたね」
優麻の端整な口元に不敵な笑みが浮く。
夜の廃校舎。そして迷いこんだ生徒たちを脅かすためだけに、不規則に出現する怪物たち。その構造はまさしくお化け屋敷そのものだ。
だが、お化け屋敷を現実世界で再現することが、闇誓書の所有者の目的だとすれば、この奇妙な異変にも説明がつく。古城が異変に絡んでいるという、優麻の推理とも合致していた。
「古城たちの教室は？」
「こっちです。もしこの廃校舎の構造が、彩海学園と同じなら――」

雪菜はそう言って薄暗い廊下を走り出す。だが、それから数歩もいかないうちに足を止めた。雪菜たちの行く手を遮るように、立ちはだかっている人影がある。
表情のない仮面で顔を覆った、華やかな髪型の少女だった。
「あなたは……!?」
殺意にも似た異様な気配を感じて、雪菜は咄嗟に槍を構えた。
仮面の少女は武装していない。しかし骸骨兵士などとは桁違いの濃密な魔力が、彼女の周囲に渦巻いている。
「……ただの幻影じゃない……黒幕の登場かな？」
優麻が〝守護者〟を実体化させながら問いかけた。
それに答えるかのように、少女の周囲に怪物たちの群れが出現する。
雪菜は無言で槍を握る指に力をこめた。どうやら古城たちの教室には、簡単には行かせてもらえないようだった。

7

豪華賞品に釣られたのか、ベストカップルコンテストの参加者は予想外に多かった。ただし参加者の大半は、ウケ狙いの同性カップルだ。企画の趣旨を勘違いしているとしか思えない謎のゆるキャラ軍団や、つがいのニワトリ二羽を連れてきた生物部員、さらには美少女フィギュアを大切そうに抱えた模型

部員まで、バラエティに富んだ顔ぶれである。
「なによこれ。参加者はイロモノばっかじゃない！」
出場者の控え室を見回した浅葱が、唖然としたように低くうめいた。
俺は気が楽でいいけどな、と古城は口の中だけで呟いて、
「しょせん中学高校の学園祭だしな……ベストカップルっていっても普通こんなもんだろ。どうする？　やめるか？」
「やるわよ！　ここまで来て、あとに引けるわけないでしょ！」
「まあいいけど、この恰好じゃインパクトが弱くないか？　ほとんどコスプレ大会だぞ？」
あまりやる気のない口調で古城が指摘する。
ウケ狙いが目的なのだから当然といえば当然だが、参加者のほとんどは趣向を凝らした衣装をまとっていた。女装や男装はもちろんのこと、アニメやゲームの有名キャラに扮した連中も多い。逆に本気で優勝を狙っているガチなカップルの大多数は、お揃いの仮装やペアルックでラブラブぶりをアピールしようと目論んでいる。いずれにせよ制服姿の古城と浅葱は、彼らの中では圧倒的に地味だった。
「たしかにインパクトは大事よね。こんなこともあろうかと、用意しといてよかったわ」
思わせぶりにそう言って、浅葱は教室から引きずってきたスーツケースを開ける。ケースの中から出てきたのは、豪華なレースをあしらった純白のウェディングドレスだ。
どこからそんなものを持ってきたのか、と一瞬驚いた古城だが、
「これってお化け屋敷用の仮装じゃねーか！　花嫁の幽霊役が着る予定だった……」
「ウェディングドレスはウェディングドレスでしょ。黙ってればバレないわよ。ほら、古城も早く着替えて」
「……ったく」
無理やり押しつけられたタキシードを眺めて、古城は小さく溜息をついた。しかし冷静に考えてみれば、ベストカップルコンテストにブライダル衣装で出るというアイデアは悪くない。
割り当てられた控え室で慣れない正装に着替えて、古城は浅葱が出てくるのを待つ。と、しばらくして更衣室の壁の向こうから、浅葱の声が聞こえてきた。
「古城、終わった？　ちょっとごめん、手伝って」
「あ、ああ……わかった。入るぞ？」
ほかに人がいないことを確認して、古城は更衣室の中へと入る。そこには着替え途中の浅葱の姿があった。ずり落ちそうになるドレスの胸元を、両手で懸命に押さえている。
「えーと……」
「古城、これ！　背中のリボン、引っ張って！」
「リボン？　ああ……これを結べばいいのか？」
編み上げになっているドレスの背中を見て、古城は純白のリ

ボンに手を伸ばす。仮装用のレプリカとはいえ、さすがに一人でウェディングドレスを着るのは無理があったらしい。
「どうしたの？　もっとちゃんと引っ張ってよ」
「いや、そう言われても」
　睨むように振り返ってくる浅葱の視線から、古城が居心地悪そうに目を逸らす。なにしろウェディングドレスというやつは、想像以上に大胆に肩と背中が露出しているのだ。おまけに浅葱が髪をアップにしているせいで、白い首筋が思いっきり露わになっている。
　間近でそれを見せつけられた古城は、激しい渇きを覚えて喉を鳴らし、
「こ、こらっ……いつまで見てるよ!?」
　さすがに頬を赤らめながら、浅葱が古城を睨みつけた。悪い、と古城は慌ててリボンを握り、浅葱のウエストを締め上げる。が、その直後に鼻の奥が熱くなり、突然の息苦しさに襲われた。
「どうしたの、古城？　ちょっ……あんた、鼻血！」
　たらたらと鼻血を噴き出した古城に気づいて、浅葱が小さく悲鳴を上げる。
「ああ……そうだな……」
　しかし古城は妙に冷静な気分で、流れ落ちた鼻血を拭っていた。

8

「〝蒼（ル・ブルー）〟！」
　優麻の〝守護者〟が突き出した大剣が、落ち武者風の亡霊を貫いた。実体を保てなくなった亡霊が、青白いノイズを撒き散らして消滅する。
　だがそれもほんの一瞬のことだった。仮面の少女が軽く右手を振ると、新たな亡霊が闇の中から現れる。ここは彼女が生み出した世界。すべては彼女の望むままに現実化するのだ。
「なるほど。なにがなんでもボクたちを、古城たちの教室に近づけたくないわけか……！」
　参ったな、と優麻が小さく舌を出す。気丈に振る舞ってはいるものの、彼女の顔にはうっすらと疲労の色が滲（にじ）んでいた。敵の数があまりにも多すぎるのだ。
「優麻さん、仮面の少女（ひと）はわたしが相手をします。先に行ってください！」
　銀色の槍を振るいながら、雪菜が優麻に呼びかける。
　疲れているのは雪菜も同じだ。このまま二人で怪物たちの相手を続けていれば、いずれ力尽きるのは明白だった。相手の力の源を断たない限り、仮面の少女は倒せない。
　しかし優麻は、残念そうに笑って首を振る。
「そう言ってもらえるのはありがたいけど、そう都合よくはいかないみたいだ」

「え……？」

優麻の視線を追って、雪菜も気づいた。仮面の少女の背後から、新たな影が姿を現す。だがそれは、これまでの怪物たちとは異質な敵だった。赤い装甲に覆われた、無骨なシルエットの現代兵器だ。丸みを帯びた砲塔が旋回して、巨大な砲身が雪菜に向く。

「リディアーヌさんの……超小型有脚戦車（マイクロロボットタンク）!?」

「まずい！　〝蒼（ル・ブルー）〟ッ！」

優麻の〝守護者〟が空間を歪めて、強制的に雪菜を転移させた。その直後に放たれた有脚戦車（ロボットタンク）の砲弾が、直前まで雪菜が立っていた場所をかすめて飛んでいく。

校舎の壁に激突した砲弾が、凄まじい爆風とともに破片を撒き散らした。もしも直撃していたら、雪菜の肉体などひとたまりもなく吹き飛んでいただろう。

「姫柊さん、気をつけて。あいつにはキミの槍は効かない」

呆然と立ち尽くす雪菜に向かって、優麻が険しい表情で告げた。

「あいつは幻覚じゃない。実体だ。たぶん制御システムを誰かに乗っ取られてるんだと思う」

「システムを乗っ取った……？」

『然様（さよう）……面目（めんぼく）ないでござる、二号殿』

「に、二号？」

戦車の外部スピーカーから流れ出した頼りない声に、雪菜はなんともいえない表情を浮かべる。リディアーヌが雪菜に向けた二号という呼び名が、古城の愛人という意味だと直感的に気づいたからだ。その場合、本妻はやはり浅葱ということになるのだろう。

戦車の中に閉じこめられているリディアーヌは、かなり消耗しているようだった。他人の無茶な操縦に振り回されているのだから無理もない。早めに助け出さなければ、彼女の体調も心配だ。

「あの戦車を乗っ取れるようなハッカーに心当たりは？」

複雑な顔をしている雪菜に、優麻が訊く。

「わかりません。ですが、藍羽先輩なら、たぶん」

「藍羽さん……なるほど彼女か。ただ者じゃないとは思ってたけど」

ふむふむ、と優麻が感心したように呟いた。優麻は絃神島に着いた直後に、浅葱と顔を合わせているのだ。

「念のために確認しておくけど、ここは藍羽さんが望んだ世界だと思うかい？」

「いえ。それはないと思います」

優麻の新たな質問に、雪菜はきっぱりと首を振る。浅葱の姿を真似てはいるが、怪物たちを従えている仮面の少女は浅葱ではない。浅葱には恐怖の館（ホーンテッドハウス）の世界を実体化する動機などないし、そもそもこの世界には彼女が好む要素がなにもない。美味しい食事も、流行りのファッションも、そして暁古城も。

「だろうね」
クス、と優麻が微笑んだ。
「だとすれば、この〝現実〟は、幻術サーバーの暴走が生み出した副産物かな」
「幻術サーバー……？　コンピューターが、闇誓書の力を？」
「人工知能（AI）っていったっけ。作り物（プログラム）とはいえ、自我を持っているのなら、魔導書を起動することだって不可能じゃないさ。お化け屋敷の運営用にセッティングされたコンピューターが、お化け屋敷を実体化させるというのは、むしろ自然な成り行きだと思うよ」
「は、はあ……」
雪菜は曖昧（あいまい）にうなずいた。優麻の主張は突飛だが、いちおう筋は通っている。それに幻術サーバーのプログラミングを担当したのも浅葱のはずだ。浅葱のハッキング技術を記憶している人工知能（AI）なら、おそらくリディアーヌの戦車を乗っ取ることもできるだろう。
「だったら本物の藍羽先輩はどこに……!?」
「ここではない別の〝世界〟かな。たぶん藍羽さんが創り出した〝世界〟は、ほかにある」
「藍羽先輩が望む〝世界〟……」
雪菜が、仮面の少女の背後に鋭い視線を向けた。
闇誓書は、所有者（オーナー）の望むままに世界を書き換える魔導書だ。ただし上書き可能な世界の数は、一種類だけとは限らない。事実、仙都木阿夜は雪菜の前で、同時に複数の世界を生み出してみせた。ただしそれは結界の内側に構築された、小さな世界でしかなかったが。
「……先輩たちの教室に結界が！」
隠されていたもうひとつの結界の存在に気づいて、雪菜は〝雪霞狼〟を握り締めた。
古城たちのクラスの教室が、強大な魔力の障壁にすっぽりと覆い尽くされている。おそらく浅葱はその中に閉じこめられているはずだ。そして幻術サーバーの本体もそこにある――
『行カセナイ……！』
仮面の少女が、敵意を剥（む）き出しに咆哮（ほうこう）した。リディアーヌの有脚戦車（ロボットタンク）が、前脚に内蔵された機銃を乱射する。
しかしその攻撃は雪菜には当たらない。優麻の〝守護者〟から伸びた魔力の糸が、有脚戦車（ロボットタンク）の機体を操って射線を逸（そ）らしていたからだ。
「優麻さん――!?」
「大丈夫。肉体を乗っ取って操るのは、ボクの〝蒼（ル・ブルー）〟もわりと得意だからさ」
優麻が強気に笑ってみせた。空間を歪めて神経同士の接続をつなぎ替えることで、彼女はかつて古城の肉体すら操ったことがある。その応用で今回は、有脚戦車（ロボットタンク）の電子回路を物理的に乗っ取っているのだろう。
しかし空間制御に魔力のほとんどを回しているせいで、今の

優麻には、戦闘能力がほとんど残されていない。この状況が長引けば彼女が危険だ。迷っている時間はもうなかった。

「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」

厳かに祝詞を詠いながら、雪菜はありったけの霊力を〝雪霞狼〟に流しこむ。〝雪霞狼〟に刻まれた術式が起動し、清浄な光が槍を包んだ。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

銀色の槍の一閃が、眩い神格振動波の輝きとともに虚空を薙ぎ払う。張り巡らされた結界が斬り裂かれ、真昼の白い光が世界を染めた。

怪物たちが蠢く〝夜の世界〟が崩壊を始めていく。

「お互いのことをどれだけ知っているかクゥウ――イズッ！」

ステージ上の司会者が、異様なハイテンションで絶叫した。校庭に集まった観客たちが、それにつられて高々と拳を突き上げる。

そんなヤケクソ気味の光景を、古城と浅葱は、ステージの上から無表情に眺めていた。

「パートナーに対する深い理解は、理想のカップルの最低条件！

というわけで、相方の身長、体重、生年月日に好きな食べ物、趣味や過去の恥ずかしい体験などをことごとく暴露して、決勝の舞台に勝ち上がってきたチャレンジャーの皆様がこちらです！」

司会者に無理やり背中を押されて、古城たちはステージ中央に歩み出る。

もちろん古城はタキシード着用、そして浅葱は純白のウェディングドレス姿だ。だがそんな華やかな装いとは裏腹に、二人の表情は暗かった。

「な……なんなのよ、このコンテスト……」

「勝ち残るために、大事なものをいろいろ失った気がするぞ……」

どんよりと虚ろな目つきで顔を見合わせながら、浅葱と古城がぼそぼそとうめく。コンテストに勝ち残るためとはいえ、古城たちはお互いが知っている相手の秘密を、群衆の前で晒しまくったのだった。最後のほうは質問に答えているというよりも、単なる暴露合戦と化していた。なまじ友人としてのつき合いが長いのが、完全に裏目に出た形である。

しかし多くの犠牲を払った甲斐あって、決勝に勝ち残ったカップルの中では古城たちの成績はダントツだ。二位以下に百二十点近くの大差をつけて、優勝はほぼ確実だった。

「それではいよいよ最後の問題、暁・藍羽ペアへの質問です！ズバリ、彼女が今、キスをして欲しいと思っている場所はどこ

でしょう？　彼氏はその場所に実際にキスをしてお答えください！」

「なっ!?」

想定外の際どい質問に、古城と浅葱がうろたえる。

「ちょ……ちょっ……こんなの聞いてないわよ!?」

「ていうか、いいのか？　このコンテスト、いちおう学校行事だろ……？」

「『まあ、お互い合意の上ならいいんじゃない？』ということで、生活指導の笹崎先生の許可はいただいております！」

「雑だな、おいっ！」

あの女教師、適当すぎるだろ、と古城は思わず頭を抱えた。いくら三万円分もの食券のためとはいえ、こんな衆人環視の中でキスをするのは抵抗がありすぎる。

「とりあえず、無難なところで手の甲あたりにでもしとくか？」

「そ、そうね、ぶっちぎりのトップだし、一問くらい答えを間違っても……」

古城と浅葱が声を潜めて相談する。事前に質問の答えを提出していた浅葱としても、まさかステージ上で本当にキスをさせられるとは思っていなかったらしい。

だが、そんな古城たちの目論見を打ち砕くかのように、司会者がさらりと補足する。

「あ、言い忘れましたが、こちらの問題はラストチャンスということで、正解者には二百点のボーナスポイントが与えられることになっております！」

「なっ!?」

「今までの得点、意味ないじゃん!?」

古城と浅葱は猛然と司会者に抗議した。トップの古城たちと最下位ペアとの点差は、わずか百八十点ほどしかないのだ。この最終問題を間違っただけで、いきなり最下位転落の可能性すら残されている。

「さあ、残り時間、十五秒です。答えをどうぞ！」

古城たちの猛抗議をさらりと受け流して、司会者がカウントダウンを開始する。

ぐぬ、と奥歯を鳴らしながら、古城は動きを止めていた。

そんな古城の両頬を、浅葱がガッとわしづかみにする。そして彼女は、ぐいっ、と力任せに古城の顔を自分に向けると、ゆっくり顔を近づけてきた。

「お、おい……浅葱……」

古城の声が緊張で掠れた。

目を閉じた浅葱の長い睫毛が揺れている。白い頬は、ほんのりと桜色に染まっていた。息がかかるほどの至近距離に、柔らかそうな彼女の唇がある。

その唇が古城に触れる――そう思われた瞬間、浅葱はぱっちりと目を開けた。

「なーんてね」

どこか満足げな口調で呟きながら、大げさに肩をすくめる

浅葱。古城はそんな彼女を、混乱したような表情で見返して、
「あ、浅葱？」
「もういいわよ、古城……これって、現実じゃないんでしょ？」
「おまえ……気づいてたのか!?」
「当然よ。ウチのクラスの幻術投影サーバー、誰がプログラムしたと思ってるの？　そこそこ楽しめたから、まあいいけどさ」
驚く古城を見上げながら、浅葱は尊大に笑ってみせた。
この〝彩昂祭〟は現実ではない。それを古城が確信したのは、つい先ほどのことだった。ウェディングドレスに着替えている浅葱を見たとき、鼻血を出すほどの興奮に見舞われながらも、吸血衝動が起きなかった。そのときに古城は、自分の身体に起きた異変を知ったのだ。
今の古城の肉体からは、吸血鬼の力が失われている。
それと同じ現象を、古城は前にも一度体験していた。それは波朧院（はろういん）フェスタの夜――仙都木阿夜が書き換えた〝世界〟の中での出来事だ。
「あんたの仕業なんでしょ、モグワイ？」
コンテストの司会者や観客たちを無視して、浅葱が静かに呼びかけた。
「この世界、さすがに都合がよすぎるものね。まるであたしの望みを、そのまま実体化させたみたいに。あたし以外にそんなことができるとしたら、それはモグワイ――あんただけよ」
『ギギッ……』
浅葱の言葉が終わる前に、どこからか邪悪な笑い声が聞こえた。
その瞬間、周囲の風景が変わった。ステージの上の司会者も、校庭に集まっていた観客たちも消える。残されたのは出入り口のない無人の教室だ。
教室の中央正面――教壇の上には、作動中の大型コンピューターが置かれている。
見知らぬ少女が、その隣で、古城と浅葱を見下ろすように立っていた。
浅葱によく似た外見だが、彼女は表情のない仮面で顔を覆い隠している。仮面の下から洩れ出したのは、ギギッ、というノイズ混じりの合成音声だ。
「あいつが……モグワイか？」
「え……と、たぶんね」
古城の疑問に、浅葱が曖昧な答えを返す。仮面の少女の外見が、モグワイ本来のデザインとかけ離れていることに少々困惑しているらしい。
浅葱はめずらしく困ったような表情で、出口のない教室を見回して、
「で、どうやったら、ここから脱出できるのかしら？」
「いや、俺に訊かれてもな……」
古城は顔をしかめて首を振る。今の古城は、なんの力も持

たない一般人だ。〝世界〟そのものを書き換える人工知能（AI）が相手では、正直手も足も出なかった。

仮面の少女は、もちろんそれを理解しているのだろう。古城たちを見下ろす彼女の態度には、どこか勝ち誇ったような余裕がある。

だがそんな少女の姿が、不意に怯えたように激しく揺らいだ。

少女の背後で閃光が煌めき、空間が地割れのように引き裂かれていく。光輝く槍を構えて、暗い〝夜の世界〟から現れたのは、なぜか腰に尻尾をつけたチャイナドレス姿の雪菜だった。

「――先輩、無事ですか!?」

「姫柊!?」

驚く古城の目の前に、雪菜が槍を抱いたまま着地する。そして彼女は、古城たちのブライダル衣装に気づいてムッと眉を寄せ、

「先輩方、その恰好は……」

「あ……いや、違うぞ。これは仮装だからな！　そう、お化け屋敷用の！」

「そ、そうなの。学食の食券三万円のために仕方なく……！」

「はあ」

そうですか、と無感動な瞳で古城たちを眺める雪菜。

そんな雪菜のすぐ背後に、波紋のように空間を揺らして男装の少女が現れる。

「やれやれ。相変わらずだな、古城は」

「ユウマ？　どうしておまえまで……!?」

古城は面喰らったような表情で、突然現れた幼なじみを見つめた。

しかし優麻はそれに答えず、真面目な顔で背後を振り返る。

「話はあとだよ、古城！　先にあいつをどうにかしないと」

「あいつ……？」

状況を把握できないまま顔を上げた古城は、空間の裂け目から現れた敵影に青ざめた。

分厚い装甲板に覆われた有脚戦車（ロボットタンク）が、仮面の少女を護るように旋回し、古城たちへと砲口を向けてくる。

「〝戦車乗り〟――!?　モグワイ、まさか、あんた……！」

浅葱が顔を蒼白にして、仮面の少女を睨む。凶悪な戦闘兵器を従えた人工知能（AI）の少女（アバター）は、仮面の下でただ静かに笑っていた。

『ギギッ……』

10

有脚戦車（ロボットタンク）の機銃が火を噴いた。咄嗟に床に伏せた古城たちの頭上へと、砕けた机や椅子の破片が降りそそぐ。

「どうなってんだ、浅葱!?　モグワイって、おまえの相方（あいかた）の人工知能（AI）だろ!?　なんでそいつが俺たちを攻撃してくるんだよ

!?」

「あたしだって知らないわよ！　そもそも人工知能（AI）が実体化してる時点でおかしいでしょ！」

咎（とが）めるような古城の言葉に、浅葱が逆ギレ気味に反論してくる。

そんな浅葱を庇いつつ、古城は己の無力さに歯噛みした。

第四真祖の力を失った今の古城には、有脚戦車（ロボットタンク）に対抗する手段がない。優麻の〝守護者〟の背後に隠れて、銃弾の雨にひたすら耐えるだけだ。

「闇誓書だよ、古城」

古城の隣に屈みこんだ優麻が、冷静な口調でそう言った。

「闇誓書？　だけど、あれは消滅したんじゃなかったのか？」

「いや……残ってたんだよ。人間の目には見えない形でね」

「なに？」

古城は戸惑いながら訊き返す。

闇誓書の最初の所有者（オーナー）、〝書記（ノタリア）の魔女〟と呼ばれる仙都木阿夜の能力は、魔導書の複製だ。その能力を使って、彼女は、彩海学園の校舎に闇誓書の中身を書き記（しる）した。そして彩海学園全体を巨大な魔導書へと変えたのだ。

だが、その闇誓書のレプリカは、すでにない。ほかならぬ古城たちが消滅させたからだ。

紘神島からすべての魔力が失われていたあの状況で、闇誓書を盗み出せる者がいたとは思えない。そう、存在しなかったのだ。闇誓書を奪った人間は――

「監視カメラだよ、古城」

「カメラ……？」

「仙都木阿夜が校舎に書いた闇誓書の断片は、監視カメラに映像データとして記録されていたんだ。もちろん、データだけじゃ闇誓書は起動できないけどね……」

優麻の説明を聞いていた浅葱が、そうか、と表情を引き攣らせた。

「幻術サーバー……！　魔術を実行するために造られた、〝魔族特区〟製コンピューターの性能（スペック）なら……」

「コンピューターが闇誓書に汚染されていたってことか……!?」

ようやくこの異変の原因を理解して、古城は憮然（ぶぜん）と息を吐く。

消滅したはずの闇誓書は、監視カメラの映像記録に姿を変えて、しぶとく生き長らえていたのだ。そして浅葱たちが校内に持ちこんだ幻術サーバーを利用して、再び魔導書の呪いを実行した。人工知能モグワイも、闇誓書に乗っ取られた犠牲者だったのだ。

「だったら、その幻術サーバーをぶち壊せば――」

「馬鹿、古城！」

「駄目です、先輩！」

「うおっ!?」

教壇へと駆け寄ろうとした古城を目がけて、有脚戦車（ロボットタンク）が主砲を放った。浅葱と雪菜が慌てて古城を連れ戻し、優麻が空

間制御でかろうじて砲弾の直撃を防ぐ。
「リディアーヌの〝膝丸〟は、対魔族用の最新兵器よ！　そんなものが護ってるサーバーに、生身の人間が近づけるわけないでしょうが！」
「だからって、ジリ貧だろ、このままじゃ！」
涙目の浅葱に怒鳴りつけられて、古城が弱々しく言い返す。
まったく、と乱暴に溜息をつきながら、浅葱が取り出したのは愛用のスマートフォンだった。
「戦車なんかの相手をする必要はないってこと。要は、汚染されたモグワイの支配から、リディアーヌを解放してやればいいんでしょ」
「あの戦車に逆ハッキングを仕掛けるってことか……！」
浅葱がやろうとしていることに気づいて、古城が愕然と目を見張る。その間にも浅葱は自作のハッキング用アプリを起動して、怪しげなコマンドを次々に入力。有脚戦車のプロテクトを破っていた。
「闇誓書だかなんだか知らないけど、電脳世界はあたしの縄張りよ。好き勝手はさせないわ」
獰猛な笑みを浮かべながら、浅葱が次々に新たな携帯電話やタブレット端末を取り出した。ウェディングドレスのどこにそんなものを隠していたのかと、古城は驚くよりも先に呆れ返る。
有脚戦車の銃撃がやんだ。全身の関節が青白い火花を散らし、ゼンマイ仕掛けの玩具のように不自然な姿勢で動きを止める。
そしてゆっくりと旋回した戦車の主砲が、今度は幻術サーバーに照準を合わせた。
表情を隠した仮面の少女が、はっきりと動揺する気配が伝わってくる。
「はい、終わりっと」
素っ気ない口調で呟きながら、浅葱がスマートフォンの画面に手を伸ばす。液晶画面に表示されているのは、「ＯＫ・キャンセル」の二択だった。主砲の発射コマンドだ。
しかし浅葱が画面に触れる寸前、有脚戦車のスピーカーから声がした。
『女帝殿……それで本当にいいのでござるか？』
「え？」
自分を気遣うようなリディアーヌの言葉に、浅葱が警戒の表情を浮かべる。
「そうですね。藍羽先輩には説明しておくべきだと思います」
雪菜が真剣な眼差しで浅葱を見つめた。たしかにね、と優麻も薄く苦笑して、
「力を貸してくれるのは嬉しいけど、ボクたちはキミに伝えなきゃいけないことがある。もしキミが幻術サーバーを闇誓書の支配から解放してしまったら――」
「今のあたしは消えてしまう、ってこと？」

優麻の言葉が終わる前に、浅葱がさらりと訊き返した。
「もしかして……わかっていたんですか……!?」
雪菜が驚きに瞳を揺らした。古城はそんな雪菜に詰め寄って、
「浅葱が消えるって……どういうことだよ!?」
「つまりさ、ここにいる藍羽さんは、本物じゃないってことだよ。古城、もちろんキミもね」
雪菜の代わりに答えてきたのは、優麻だった。
「今のキミたちは、闇誓書が創り出したニセモノの世界の一部なんだ。この世界は藍羽さんが見ている夢なんだよ。きちんと確認したわけじゃないけど、キミたちの本体は、今も闇誓書に汚染されたコンピューターに接続されたままだと思う」
「夢……って、だけど、どうしてそんな……」
「闇誓書を起動するためには、幻術サーバーを操作するオペレーターと、第四真祖の魔力が必要だからだよ。闇誓書は古城の魔力で起動して、藍羽さんの願いのままに、この世界を創り出した。藍羽さんが望む理想の世界をね」
世界を望みのままに書き換える闇誓書の能力も、所有者本人には効果がない。かつて仙都木阿夜が絃神島から異能の力を消し去ったときも、阿夜自身の魔力に変化はなかった。闇誓書が浅葱の願いを叶えるためには、彼女に夢を見せるしかなかったのだ。
しかし古城は、納得できないというふうに不機嫌そうに首を振る。
「そんな馬鹿な……だって、俺たちは普通に彩昂祭を回ってただけだぞ？　なんで浅葱がわざわざそんなことを望むんだよ!?」
「えーと……いや、だからさ……」
古城と一緒に彩昂祭を回ることが彼女の願望だったのだ、とはさすがに言い出せず、優麻は言葉を詰まらせる。雪菜は、浅葱に同情するように目を伏せて、
「先輩……」
「そういうヤツよね、この男は」
浅葱が不機嫌そうに鼻を鳴らした。そしてすぐに吹っ切れたように明るく笑って、
「だけど、古城の言うとおりよ。こんなまやかしの記憶、消えたってどうってことないわ。現実の世界で、もっといい思いをすれば済むことでしょ。彩昂祭はまだ続いてるんだし」
「さすが……手強い人だね、藍羽さん」
優麻が賞賛の視線を浅葱に向ける。浅葱は誇らしげに目を細め、
「ありがと。褒め言葉だと思っておくから」
そう言って彼女は無造作にスマートフォンの画面に触れた。
「浅葱……！」
「またね、古城」
轟音とともに有脚戦車の主砲が火を噴いた。至近距離から

撃ち放たれた砲弾が、狙い違わずに幻術サーバーの筐体を粉砕する。その瞬間、世界が白く染まった。

ギギッ、と弱々しいノイズを残して、仮面の少女の姿が消滅した。

古城の意識が残っていたのはそこまでだ。

明滅する電子の光に呑まれて、浅葱の姿が消えていく。

そして世界が夢から醒める。

11

「先輩。起きてください、先輩」

すぐ近くから聞こえてくる雪菜の声に、古城はゆっくりと目を開けた。頭上から降りそそぐ午後の陽射しに、焼けつくような不快感を覚える。

見慣れた彩海学園の校庭だった。周囲がやけに騒がしい。模擬店の屋台が建ち並ぶグラウンドには、大勢の生徒や一般客の姿がある。彩昂祭が盛り上がっているのだろう、と古城は寝ぼけた頭で考える。

「姫……柊……？」

自分を見下ろしている雪菜に気づいて、古城はホッと息を吐く。

長い夢を見ていた気分だった。精神的な疲労が全身に重くのしかかってくる。特にベストカップルコンテストの恥ずかしい体験が、夢の中とはいえ地味に効いていた。戦車砲に狙われた恐怖も、やけに生々しく記憶に焼きついている。

「なんだ、夢か……妙にリアルで疲れたな……」

耳に引っかかっていた3Dメガネ風のスマートグラスを投げ出して、古城はのろのろと上体を起こす。不思議と寝心地は悪くなかったが、べつに雪菜に膝枕されているわけではない。それを確認した上で、古城は安心して壁に手を突こうとしたのだが、

「って……なんだ、この感触？　え……!?」

指先に伝わってきた柔らかな弾力に、古城の表情が引き攣った。一見控え目なようでいて、意外に豊かな胸の膨らみが、古城の掌にすっぽりと収まっている。

「さすがに恥ずかしいな、古城。姫柊さんが見てるのに……」

少し照れたような表情で、男装の少女が目を伏せる。うおっ、と声を上擦らせながら、古城は勢いよく跳ね起きた。

「ユ、ユウマ!?　おまえ、なんで!?」

本来この場にいるはずのない友人の存在が、バラバラだった古城の記憶の破片を結びつける。優麻の服装は、古城の記憶と完全に一致。雪菜も、〝雪霞狼〟を剥き出しのまま握っていた。さっきまでの出来事は、古城の夢ではなかったということだ。

「あれは現実だったのか？　闇誓書は……浅葱はどこだ!?」

目つきを険しくして、古城が訊いた。古城の身体は、すでに第四真祖の力を取り戻している。

浅葱は古城が吸血鬼だと知らない。だから彼女の願望の世界では、古城は吸血鬼の力を使えなかった。その古城が力を取り戻したということは、つまり、ここはもう浅葱の世界ではない、ということだ。それなのに古城たちの近くには、浅葱の姿は見当たらない。彼女だけが、まだ本来の世界に戻ってきていないのだ。

「藍羽さんなら、あの中だよ。たぶんね」

そう言って優麻が指さしたのは、彩海学園の敷地の外だった。

絃神島の中心部。そこは本来、キーストーンゲートと呼ばれる建物のある場所だ。四基の人工島（ギガフロート）を連結し、すべての都市機能を掌握（しょうあく）する、文字どおりの絃神島の中枢（ちゅうすう）部。だが、その巨大なビルの姿が消えていた。

代わりにそこに建っていたのは城だった。それもまともな城ではない。近づく者を拒むような険しい断崖と深い森に囲まれて、上空は邪悪な黒い霧に覆われている。そして怪物の顔を思わせる邪悪な外観――まるで古いおとぎ話に出てくる魔王の居城のようだった。

「なんだ、ありゃ……」

古城が呆気にとられたように声を震わせる。

雪菜が言いづらそうに目を伏せた。

「闇誓書がモグワイさんと融合して、自我を持ってしまったみたいなんです。それでどうやら藍羽先輩を人質にして、あの城の中に立てこもってしまったみたいで……」

「……ってことは、これはモグワイが望んだ世界ってことか……」

それで、こんなＰＣオンラインゲームのような風景なのか、と古城はむしろ納得した。

古城たちの教室の幻術サーバーは破壊されたが、キーストーンゲートの内部には、モグワイの本体であるスーパーコンピューターが残っている。そして闇誓書に汚染されたモグワイは、ネットワーク回線を経由して、キーストーンゲートに移動したのだろう。

浅葱はさしずめ、闇（ダーク）モグワイに拉致（らち）された囚われの王女ということか。

「まあ、そんなわけで藍羽さんを助け出さないとね」

立ち尽くしている古城の隣で、優麻が毅然（きぜん）と呟いた。

「行きましょう、先輩」

雪菜も槍を抱いたまま、同じように古城を見上げてくる。

古城は呆然と空を振り仰（あお）ぎ、それから大きく息を吐く。

「勘弁してくれ……」

赤く染まった夕焼けの空を背景に、魔王城は漆黒（しっこく）の威容を晒している。

彩昂祭の長い夜が、訪れようとしているのだった。

To Be Continued...

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』第7巻初回特典付録

ストライク・ザ・ブラッド・アペンド 2

彩昂祭の昼と夜

―第三章―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

装丁・デザイン／根津典彦（G-SQUARE）

協力／株式会社 KADOKAWA アスキー・メディアワークス
電撃文庫編集部

© 三雲岳斗 / アスキー・メディアワークス /PROJECT STB

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND 2

彩昂祭の昼と夜

－第三章－

1000450653-B